掲載論文の訂正について

電気学会論文誌 B, Vol.142, No.1, pp.NL1_4 (2022) に掲載の下記記事につきまして，表記に誤りがございましたので，以下を訂正いたします。

記

タイトル： 海外駐在記事 ベトナム Phy My 2.2 火力発電所駐在記

著者：前島 寛

誤	正
タイトル： 海外駐在記事：ベトナム Phy My 2.2 火力 発電所駐在記	タイトル： 海外駐在記事：ベトナム Phu My 2.2 火力 発電所駐在記
図1 Phy My 2.2 火力発電所	図1 Phu My 2.2 火力発電所

ベトナム Phy My 2.2 火力発電所駐在記

前島 寛 (Mekong Energy Company Ltd.)

1. はじめに

「フーミー第2火力発電所第2期プロジェクト」は、急増する電力需要に対応するため、ベトナム南部ホーチミン市の南東約50 kmの沿岸（ブンタウ地域）に位置するフーミー地点においてベトナム政府により計画された大規模な電源開発のうち、ベトナム初の100%外資による民活発電プロジェクトである。東京電力、住友商事およびフランス電力公社の3社合同で、Mekong Energy Company Ltd.を設立、出力71.5万kWのコンバインドサイクル発電所を建設し、2005年に営業運転を開始した。2016年に本事業は東京電力から（株）JERAへ承継され、現在筆者は（株）JERAより本事業会社へ出向し発電所の運営に従事している。本稿では筆者の経験した、コロナ禍におけるベトナムでの生活および発電所運営について紹介する。

2. ベトナムの電力事情

2020年初頭より、新型コロナウイルス感染症の流行が世界中の経済活動を停滞させ、エネルギー需要は減少した。しかし、急速な経済成長を遂げているベトナムにおいては、依然として電力需要は成長を維持している。今後も年間9%程度の成長が見込まれ、政府は水力を除く再生可能エネルギーの開発を強化する方針を打ち出している。これまでも、日本同様の固定買取価格（FIT）制度が功を奏し、特に太陽光発電の投資が加速しており、電源別構成比の2020年当初計画は、再エネ全体で7%であったのに対し、実際には太陽光発電だけで17%に達している。

太陽光発電の拡大は、当火力発電所の運用にも影響を及ぼしており、常にベースロード運転という運用は減少し、日中は最低出力での運転、あるいは2台あるガスタービンのうち1台を停止するという運用が増加しており、電力供給において担う役割の変化を実感している。

3. ベトナムのコロナ事情

筆者がベトナムへ赴任した2021年4月、ベトナムは入国制限や隔離施策等の厳格な対策により、コロナ封じ込めの優等生として知られていた。筆者も入国時には、保健省係員によるアテンドにより、空港から直接隔離先のホテルに専用車両によって移送され、2週間にわたる厳格な隔離生活を経験した。ホテルの部屋から出ることは許されず、不自由で退屈な生活を強いられたが、隔離を終えて解放されると、緊急事態宣言下の日本とは異なり、夜遅くまで飲食店は営業し、街は活気で溢れ、休日の空港には乗客が大挙して押し寄せていた。もちろん検温、消毒、健康申告等のコロナ対策は至る所で実施されているものの、人々の表情に悲壮感、危機感は感じられず、飲食も国内旅行も気軽に楽

図1 Phy My 2.2 火力発電所

しめる、そんな状況で日本とのギャップに驚かされた。政府による決断は迅速で、施策も強力、優等生であることにも納得した。

ところが、状況は一変。デルタ株の影響か、多くて2桁であった1日の新規感染者数は4月末から増加し続け、8月中旬には初めて1万人を上回った（ベトナム第4波）。都市封鎖・外出禁止等の施策を継続しているものの、ホーチミン市を中心としたベトナム南部で感染拡大は続いている。

4. コロナ禍での発電所運営

そんな最中、当発電所では計画されていたガスタービンの定期点検が6月から実施された。この時期、ベトナム国内の市・省を跨ぐ移動も規制されており、陰性証明書の提示、移動後2週間の隔離およびPCR検査が当局から求められた。また感染者が確認されるとその地域一帯が封鎖され外出ができなくなる。そのため、筆者を含めホーチミン市をはじめとした感染地域から通勤していた当社メンバーは発電所近くのホテルに駐在することで業務を継続させた。

メンテナンスにあたっては、1日平均400人を超えるマンパワーを要し、2交代で昼夜作業を行う。様々な規制の中マンパワーの確保にも苦労したが、現場に仮設テントを設置し、各協力会社毎に隔離スペースを設け接触を最小化する、全員の検温・健康申告を毎日実施する等、最大限のコロナ対策を講じ、無事に定期点検を終えることができた。

5. おわりに

感染中心地のホーチミン市へは戻るに戻れず、2ヶ月以上経った今も我々の近隣ホテル駐在は続いている。自宅・家族から離れているメンバーのストレスはピークに達しているが、電力供給を担う使命感から、粛々と業務にあたっている。このまま感染拡大が継続すれば、ホーチミン市同様、発電所周辺も外出が一切禁止され、発電所への泊まり込みも現実味を帯びてくる。1日も早いコロナ収束を願うばかりである。

(2021年9月17日受付)